

Jubellは笑わない

11:23 Jubellは笑わない。

10:58 表情が明るいとか、感情表現が豊かであるか等は、自分の充足とはじつは関係なく、自己満足[Jubel]ができていればどうでもよいことに気づいた。

真理は表面的なものかもしれない。

こんな名前を名乗る時点でそうだが、私は「真理 (Wahrheit)」に対してこだわりがある。ただ、真理を深遠なものや神的な存在とは見なさないのが今の私で、そこにそのまま現れた「表面」さえも真理なのではないか？というスタンスすら取る。その行き着く先が、現象学的な記述スタイルだったのかもしれない。

本能と情緒から生まれる幻想的概念としての愛／現象として起こり得る愛

高度な知性と感情をもつ「生物」に生まれたがゆえ、本能的な範疇に情緒が入り混じって形成されたのがわれわれである。

愛とはその上で、人に依ってはそれが与えられないと生きられないとも錯覚される幻想的な概念で、何ら生の中核ではないのだ。

宗教をつくって心を落ち着けるのと根源は似ているが、その実体は巣の中で餌を待つ小鳥のようでもある。

かつて何処かに親鳥たる存在が居ると信じていた過去の私を、私は今ここから観ている。

[2026/3/21 追記]

恋愛や性愛のように「愛という語のつく虚構」は存在するものの、それとは別個に「現象として起こり得る愛」を私はあれから考えてみた。

それは、べったりとまとわりつくようなものでも、価値や意味を塗りたくるようなものでもない。愛という概念そのものは依然として幻想的であるが、それでも気にかけてしまうもの、それでも見捨てられないもの、そういった気持ちが起こることという「現象としての愛」だ。

尤もその現象に「愛」という語を安直に宛がっていかどうかすら、私はわかってはいないものの、「愛」と呼ばれ得るもののすべてを斬る必要はないと今は感じていることをここに書き残したい。

袖振り合うも他生の縁

触れ合えるところだけ触れ合って、互いの世界の成立の仕方に敬意を払いながら有難く通り過ぎる仕方。

solitude

愛したsolitudeはかすかにほろ苦くて、それが美味しかった。

2026/03/04 11:16

生きていることは奇跡でも だからこそ何も生まなくていい。そう居られる気がした。

2026/3/11 18:16

[青の文字]世界のすべてをひっくり返しても残るようなものにかきたい。

[緑の文字]もう見ているかもな。

Jubelへの忠誠を誓い、Übelになる。

「君が笑ってくれるなら 僕は悪にでもなる」

(中島みゆき「空と君のあいだに」より)

この歌詞には、作詞者の想定するシチュエーションや目線、解釈があることは知っている。然しそれを敢えて一度外して、もしも「君」と「僕」が同一人物であったなら？という解釈をしてみたことがある。

そして、その場合には、これは「自己への忠誠を誓う歌」と読めるのだ——さらに、ここで言う「悪」というのは単純な背理のことではない。

常識というものが世の中にはある。普通はこうするというテンプレートが大枠で存在する。それに背くことで何かしら悪く言われることがある。それでもそのテンプレートに背いて、自己の選択をする・自己を生きるという意味での、変奏的な「悪」の形である。

つまり私はその時「空と君のあいだに」を、Jubel[自己自身の幸せ]のために Übel[誰の顔色もうかがわぬ道]を選ぶ、そういう歌と取ってみたわけだ。

本来の歌の意図とはかなり色の異なる解釈であるのは承知の上だが、そういう歌として私は「空と君のあいだに」を好んでいる節があるような気がする。